
夏と少女と風車

ユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏と少女と風車

【Nコード】

N4765Z

【作者名】

ユキ

【あらすじ】

とある有り触れた夏の日の出来事

(前書き)

冬なのに夏を題材にした短編を書く暴挙。たった4000文字程度の短い作品ですが、楽しんで貰えれば幸いです

夏の日。

空は白と青の二色。歩いている路地裏は影に染まっていた。

どこにでもあるその夏の景色は、別に特別幻想的でもないし、美しくもない。どんな軽装でも抗えぬこの暑さが鬱陶しいだけだ。影の中で涼んでも、一時凌ぎにしかならない。

どこかで蝉の声が響き渡っている。

子供たちが走り回る音が聴こえる。

本当に、良くある夏の日である。

路地裏を出ると、焼き殺そうとしてるんじゃないかと思う程の暑さが襲ってきた。途端に、首元や額に汗がにじみだす。目的の場所へは、まだまだ時間がかかる。

「あら、こんにちわ」

「ああ、どうも」

通りすがりの少女に挨拶をされた。金髪のロングで、麦わら帽子の可愛らしい子だった。背丈的に、小学4年くらいだろうか。随分としっかりしてる雰囲気だ。思わず、返した言葉を子度向けにするのを忘れてしまうくらいに。小学生相手に「どうも」はないだろう。そんな大人びた雰囲気少女は、挨拶を交わすとそのままさつきまで俺が通った路地裏へ入っていったようだった。確認はしていないが、あのまま真っ直ぐ進めばそこ以外に通る道はない。

「……ねえ」

「ん？」

と、思いきや、少女は再び俺に声をかけてきた。背後からの呼びかけに振り返ると、少女以外に人は居なかったため、この少女以外が声をかけてきたとは考えられない。幻聴なんてもつての外だ。

少女は、こちらをジッと見据えていた。何となく、品定めされているかのようにあまり心地良くない。とは言え、邪険に扱うのも気が引けたため、こちらもジッと少女を見据えてみた。特に、反応はない。

そのまま数秒、ようやく少女が口を開いた。

「そうね。暇だからあなたに着いて行くわ。良い？」

「いや、良い？って言われても、いきなり過ぎるだろ」

「別に、駄目なら良いわ」

「……いや、別に良いけどさ」

「そう。じゃあ、遠慮なく着いて行くわね」

「……………そうか」

よく分らないが、少女が着いて来ることになった。別に困るわけではないが、意味が分からない。

とりあえず歩を進めると、少女はちゃんと着いてきた。後ろから足音が聞こえてくる。振り返ってみると目が合い、可愛いらしい笑みを向けられた。何となく、あいつを思い出す笑みだ。これだけ、妙に子供らしい。雰囲気は大人びているが、無意識な部分はまだまだ純粹らしい。何となく、安心してしまう。

「今日は、風がないわね」

「そうだな。昨日も、一昨日もなかった」

「じゃあ、明日もないのかしら」

「さあな」

「あると良いわね。じゃないと、その風車かたぐるまが可哀想だわ」

風車。どうやら、俺が手に持っているもののことを言っているようだった。少女の手には何も握られていないし、それ以外は考えら

れない。赤色の、とてもシンプルな風車。今は風が吹いていないため、その存在意義を果たせていない。一息かければ回るだろうが、それでは「息車」になってしまう。どうせなら、自然の風で回したい。

「そうだな。明日は回ると良いな。けど、なるべく今日回って欲しかった」

「そう。それは残念ね」

「ああ、残念だ」

蝉の声が大きくなっていく。どうやら、近くで鳴いているようだ。ジワジワと言う鳴き声と共に、夏の日差しがジワジワと俺と少女とコンクリートの道を照らしていく。少女は麦わら帽子を被っている分日射に対抗出来ているが、俺はしっかりと頭部に熱を蓄えてしまっている。今日は本当に暑いな。

そんな真夏の道を、俺と少女は黙って淡々と歩いて行く。目的地までは、もう少し時間がかかるようだ。風車は未だにその責務を果たせずにおり、カラカラと不満そうに揺れていた。

「けど、何で風車なんて持ってるの？」

「土産だよ。今向かってる場所で待ってる奴が、好きなんだ」

「ふーん。で、どこへ向かってるの？」

「着いて来れば分かるだろ」

「それもそうね」

会話終了。再び無言で歩を進めていく。ジリジリと身を焦がしながら、ただただ無言で。風車の揺れる音は妙に大きく聴こえ、風よ吹けと夏の空に訴えかけているかのようだ。しかし、その願いは届かないようで、風は一向に吹く気配を見せない。無風だ。やはり、風車はどこか不満そうであった。

そして。そのまま歩くこと、数十分

「着いたぞ」

ようやく、目的地へと辿り着いた。

そこは、幾分か空気がひんやりとしており、それなりに涼しい場所だった。木陰も多く、先ほどまでの暑さは完全に和らいでいる。しかし、あまり長居はしたくない。何故なら

「……………墓場？」

「ああ。見ての通り、墓場だ」

そう、墓場だからだ。住宅街から少し離れた場所にある小規模な共同墓地である。正直、長居をしたいとは中々思えない場所だろう。用が済んだらすぐに帰りたい。昼で明るいとは言え、涼むために居座るにはいささか気が引ける場所であることは間違いない筈だ。

「やつぱり、墓参り？」

「それ以外に何をしろってんだよ」

「それもそうね」

少女と言葉を交えながら、目的のお墓へと向かう。俺以外にもお参りに来ている人は何人かいるようで、お墓の前に座り込み、何かを添えていたり、語りかけていたりしているように見えた。普通、共同墓地は、家族が居なかつたりして一人暮らしをしていた人が入ることの多いお墓だが、血縁以外の繋がりがあつた場合、こうしてお参りに来てくれる人が居る時もあるようだ。現に、俺もその一人でなのだから。

「ほら、ここだ。待ってた奴が居るのは」

「まさか、もう亡くなってる人とはね……。あなたとはどんな関係だったのかしら？」

「別に。ただの恋人だ」

「そう」

ここは、10年前に亡くなった恋人のお墓だ。死因は交通事故。病院に駆け付けた頃には、とつくに息を引き取っていた。肉親は既にこの世にはおらず、葬式も信じられないくらいの少人数で行われた。今日はその彼女の命日であり、毎日こうやって墓参りに来ると言っわけである。

「ちなみに、何で風車を持って来たの」

「言つたろ。こいつが好きだったんだよ。すげえ子供っぽい奴でさ。少し風車が廻っただけで、すげえ喜んでたよ。その時の笑顔は、お前の笑顔にそっくりだったな」

俺は、去年置いた風車を新しい風車に交換しながら、そう語った。本当、どこまでも無邪気で、純粹な奴だった。死んだつてことがあまりにも似合わなくて、今でもお墓の後ろからひよっこり顔を出してくるんじゃないかと思っっているくらいだ。

けれど、そんなことはあり得ない。あいつはもうこの世にはいないし、笑顔も見せてくれない。それが「死」つてことだし、受け入れる他ないだろう。いつまでも未練たらしく縋っていたら、あいつも困るだけだ。

「……今でも、彼女さんは大好きなの？」

「んー。まあ、な。いつまでも忘れないだろうよ」

「あら、そう。ふふ、素敵ね」

「そりゃどうも」

何か、褒められた。小学生に褒められて照れるなんてことはないが、まあ、悪い気はしなかった。それにしても、相変わらず大人びた口調だ。わざとらしさもないので、見かけとのギャップがとても大きい。背伸びをしてるならまだ分かるが、完全に自然体だ。変わった奴だな。

「じゃあ、用事はこれで終わり？」

「ああ、そうだな。じゃあ、帰るとするか」

「そうね」

お参りは済んだので、もう帰ることにした。結局、少女は最後まで俺に付いて来たと言う事か。良く分からないが、最近の小学生は暇が高じると誰かに着いて行くのがブームなんだろう。そんなわけないな。

再び照りつける日差しに目を細めながら、元来た道を辿っていく。蝉の音は未だに止んでおらず、音の洪水となつて耳に流れ込んでく

る。何でもない夏の光景だが、後ろに居る少女は少し何でもある様子な気がする。とは言え、別に深く聞く気はない。妻わら帽子の位置を調整しているその少女を見つめながら、そんなことを考えていた。

「……ねえ」

「ん、何だ」

「本当に、今でも彼女さんは、好き？」

「ああ、本当だ」

「………そっか」

えへへと、少女が笑った気がした。実際は見えてないので分からないが、その一言には、どこか喜色が見え隠れている気がする。何より、どこまでも無邪気な声だったのだ。きつと、笑顔が良く似合うような、そんな声。大人びた雰囲気は自然なら、子供らしい雰囲気もまた自然のようである。やはり、不思議な奴だ。

「……ねえねえ」

「何だよ」

「私、彼女さんより大人っぽいかしら？」

「そうだな。けど、時々見せる子供っぽさは、あいつとそっくりだ」

「そうなの？」

「ああ、そうだ。まるで、あいつが頑張って大人っぽくなったみたいだな」

そう。ちゃんと大人になれたけど、その強い「無邪気」と、「純粹」さだけは薄れなかった。そんな感じだ。だから、大人びてもいるし、どこまでも無邪気で子供っぽくもある。

「別に、私は頑張っていないけど」

「そうだな。本当、不思議な奴だよ」

「あら、そんなことないわよ」

「ははっ。どうだか」

「むー……」

夏の日。

どこまでも有り触れたその真昼の暑さは、俺達を容赦なく焼き尽くそうとしている。

空は、曇ることを知らないかのように、どこまでも晴れ渡っていた。

子供達は、暑さを吹き飛ばすかのように、元気に走り回っているようだった。

やっぱり、本当に良くある夏の日だった。

「じゃあ、私はこっちだから」

「ああ、気を付けて帰れよ」

「ええ。それじゃあ、また会えたら良いわね」

そう言っつて、鮮やかに照らされた金髪を揺らしながら、少女は路地裏へと走り去っていった。途中で麦わら帽子が落ちそうになり、慌てて抑えていたのを見てしまったが、そんな少女を、俺は姿が見えなくなるまで見送ったのだった。

そして、姿が見えなくなって、俺も家に帰ろうと思った時、

「……お」

どこまでも優しい風が、頬を撫でて行った。同時に、どこかで風鈴が微かに鳴り響いたようだった。チリンと言つ音が夏の空間に溶け、静かに消えていく。

そして、

カラカラと、風車の回る音が聴こえてきた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4765z/>

夏と少女と風車

2011年12月16日01時57分発行